

## 在外日本美術品の情報収集の試み

別役恭子 早川聞多  
国際日本文化研究センター

我々のプロジェクトは海外にある日本美術品の総合的なデータベース作りを目的とするが、本プロジェクトの試み最大の特長は、美術品のデータベースには不可欠である画像を、従来の写真フィルムではなく、高精度のデジタル・データで取り込むところにある。本稿では、最初に従来の写真フィルムによる画像蓄積の問題点を挙げ、次にデジタル画像を基本にした本システムの概要を解説する。さらに、デジタル画像をコンピュータとリンクさせたデータベースがいかなる有効性を持つかを列挙する。そして最後に、現段階で考えられるシステムの改良点と、国際レベルでの美術品データベース作成の問題点を指摘しておく。

A Database for Japanese Art Objects --- a trial

Yasuko Betchaku Monta Hayakawa

International Research Center for Japanese Studies

3-2, Oeyama-cho Goryo, Nishikyo-ku, Kyoto 610-11, Japan

The goal of our project is to establish a comprehensive database for Japanese art objects abroad. The project differs from other similar types mainly in its method of gathering pictures not using photographic images but using digital ones. In the following discussion, firstly, some problems of using the photographic images are pointed out. Secondly, the digital images and their linkage with a computer (i.e. a database) are explained further. Lastly, some improvements for the present system and some problems for establishing an art object database at an international level will be discussed.

## 1 まえがき

日本の美術品が海外で愛好された歴史は古く、特に大航海時代以降、桃山時代から江戸時代にかけて、漆工品や陶磁器が数多くヨーロッパに輸出され、やがて近世末から明治になると、浮世絵や根付や印籠といった工芸品が大量に海を渡ったことはよく知られている。その他にも、こうした工芸品や版画に限らず、優れた絵画や彫刻が優れた審美眼によって数多く見出され、それぞれの国で愛好されてきた。本プロジェクトではそうした海外に流出した日本美術品を総合的に調査研究するとともに、そのデータベースを作成することを目的としている。

\* **印籠**：薬を入れて腰にさげる小容器。本来は室町時代に中国から輸入された重ねの葉籠や印入れのことであるが、江戸初期には応急の薬を入れて携行するのに便利なように小型化し、やがて中期には何も入れずに男性の装身具となった。そのため装飾に意匠をこらすようになり、形態や材料ばかりでなく、文様や技法に多種多様な工夫がこらされ、江戸時代工芸の一大特色を示した。

\* **根付**：印籠やタバコ入れを腰に提げるために、印籠やタバコ入れの紐の先端に付けて帯に挟んだ細工物の滑り止め。3～4cmの小形であるが、男性の装身具の一つとして江戸後期から明治初期にかけて流行し、意匠や技巧に様々な工夫がこらされた。特に意匠の奇抜さや技法の精巧さには目を見張るものがある。

この調査研究によって、これまで国内では未知であった作品が発掘され、新しい日本美術史の研究が可能となる。また各地域への日本美術の流出の分析を通して、日本文化の国際交流の歴史とその特徴を研究することができ、美術品を通じた日本文化の多角的な国際研究の基礎を築くことができるであろう。

海外の日本美術品の所在は大きく分けて、公共

の美術館・博物館、有名コレクション、個人所有に分けられるが、本プロジェクトでは美術館・博物館の所蔵品を網羅することを第一目標とし、また出来得る限り有名コレクションをカバーしたいと考えている。

なお、海外の日本美術品の総合的な調査としては、東京文化財研究所を中心としたグループが昨年からは北アメリカの調査を開始している。本プロジェクトでは重複を避けるため、ヨーロッパ地域に散在する日本美術品を対象とする予定である。

## 2 美術品データベースに求められるもの

### 2.1 画像情報を伴っていること

数年前、ある出版社が日本美術の文字データのみデータベース・サービスを開始したが、検索の際、同じ題名の作品、同じ作者の作品が何ページも出て来ることがしばしば起こり、絞った検索がなかなか出来ないことが大きな問題になったことがある。その検索打ち出しを見たある研究者が、せめて小さな写真でも付いてくれたら、一目で各々の作品の特徴が推察できるのにと嘆息を漏らしているのを聞いたことがある。これからも判るように、美術情報データベースには単に作品名や作者名といった文字データだけでなく、画像データが伴っていることが不可欠なのである。イメージを表現手段とする美術品の成立から考えても、その特色を文字で表すことには原理的に限界がある。故に、美術品のデータベースを作る際には、少なくともその作品が概観できる程度の画像を最低限必要とするのである。

### 2.2 蓄積画像が劣化しないこと

これまで美術館や博物館では、美術品の画像はおもにモノクロまたはカラーの写真フィルムで蓄積してきた。しかし写真の最大の弱点は、特にカラーフィルムの問題点は、色が平均10年、早い場合には7・8年で退色するという点である。多く

の場合、美術品というものは一点物であって、かけがえのない貴重品であるため、フィルムが退色したからといって、容易に再撮影できるものではない。それは単に許可が得にくいとか遠距離にあるからといった理由からだけではなく、かけがえのない美術品の保存の面からいっても、たびたびの写真撮影は避けられるべきことなのである。最近では非常に退色しにくいフィルムも開発されているが、フィルム代も撮影代も通常のものよりも高価である。こうしたことから考えて、美術品データベースの画像は先ず退色しない、ないし退色しにくいものである必要がある。

### 2.3 画像が容易に取り込めること

本プロジェクトで対象とする美術品の総点数は、調査がなされていない現段階ではもちろん未知であるが、西欧の美術館・博物館についてはおよそ40,000点と見ている。これにこれまで未調査の東欧の美術館・博物館・大学図書館のコレクションや個人コレクションを含めると、約100,000点を越すと想像される。

このように大量の画像を取り込むには、従来のように、一点一点時間をかけて撮影する方法を採っているのは、時間的にも費用的にも到底不可能であろう。もちろん、精密な技術を駆使した写真にはかけがえのない価値があるのではあるが、大量の画像を扱うデータベース作りには、やはり今までは違った方法が必要なのではなかろうか。こうした問題に対して、本プロジェクトでは一つの提案をしたい。

## 3 調査手法の概要と特長

### 3.1 画像を高精度デジタル・データで取り込む

以上のような観点から、本プロジェクトでは作品の画像を高精度のデジタルデータ、すなわちハイビジョンレベルの画像をRGB各256階調で取り込むことを計画している。この方法だと、現場で

画像が撮れたかどうかその場で確認でき、さらに現物と照合しながら、色のコントラストや明度を調整して入力することが可能である。特に海外で取材ことになる本プロジェクトでは、後でフィルムを現像して失敗していたということがあっては困るので、この方法はなかなか有効であると考えている。

### 3.2 基本的文字データを現場で入力する

次に美術品の文字データ、すなわち作品名・作者名・所蔵者名といったようなデータは、画像入力と同時に現場で入力することを考えている。従来の方では、写真の現像・焼付が終わるのを待って、後で照合しながらデータカードを作るのが普通であったが、データ件数が大量になった場合、その整理にかかる手間と時間は大変なものであった。それを解消する手段として、現場で基本的な文字データを入力し、コンピュータ上でリンクさせるこの方法は有効であると考えている。

### 3.3 データベースの様々な利用を可能とする

コンピュータ上で文字データと高精度の画像デジタルデータをリンクさせておくと、次のようなさまざまな利用活用に際して、その対応が容易である。

- 1) 海外にある日本美術の所在情報は、個人コレクションを除いても、まだほとんどできていないのが現状である。そのことから考えて、本データベースを公開することによって、各国・各館がお互いに情報を平等に活用することができ、新しい研究や展覧会を企画するのに役立つ。
- 2) 所在調査を行った際、その成果をなるべく早く公にすることが重要な任務であるが、従来の方では、その整理に時間と手間がかかり過ぎた。本システムを使うと、データをCTS（コンピュータ印刷システム）と直結することによって、調査報告やカタログ作りが迅速にできる。
- 3) 画像データをコンピュータ上だけにおいても、

それを見ることのできる機器がなければ利用できないことになり、利用される範囲が限られてくる。そうしたことを補う手段として、画像データを直接スライドまたはカラープリントに打ち出すことによって、内外の研究者に研究資料として提供することができる。

- 4) これまで研究発表や共同研究で美術資料をディスプレイする場合、スライドを用いることがほとんどであったが、その準備と整理には時間と費用がかかり、また投影順に制限されることもあった。しかし画像がコンピュータ上にデジタルデータとして蓄積されていると、ディスプレイのためのきめ細かい画像編集が容易になる。

#### 4 必要と思われる改良点と問題点

前に列挙したような利点は想定されるのであるが、現状ではまだまだ不備な点も指摘できる。今後の開発のために、現在のところ考えられる問題点を簡単に記しておく。

##### 4.1 システムの改良点

- 1) 最近ではハイビジョン撮影用のカメラやモニターもたいへんコンパクトになってきてはいるが、画像制御やフレーム・メモリー機器などがまだまだ大きなものなので、本プロジェクトのように外に持ち出して現地で取材する場合には、もっとコンパクトなものにする必要がある。現在採用している機器は、本来こうした目的のために設計されたものではないので仕方ないかも知れないが、今後高精度の画像を現地で取材するという利用法が多くなると予想されるので、そのためのポータブルなシステムの開発が望まれる。
- 2) 現在使っている照明は相当光熱を発生するものであるが、撮影の対象が貴重な美術品ということから考えて、美術品の保存の面から、発熱を極力抑えた照明に切り替えなければならないと考えている。一案としては、高周波の蛍光管を考

えているが、今のところそれがうまくカメラと同調するかどうか分かっていない。どちらにしろ、この点は是非とも改良しなければならないと考えている。

##### 4.2 データベース作りの問題点

本プロジェクトのデータベースは、国際的に開かれたものを目指しているが、そのためには様々な問題があると考えられる。最後にその主要な問題点を記しておく。

- 1) まず最初に使用言語の設定が大きな問題となる。日本美術が対象であるから、まず日本語を基本にするのが順当と思われるが、はたしてそれだけで通用するのかということが問題である。というのは、コンピュータでネットを張った場合、相手の国のコンピュータが日本語を扱えるかどうか、はなはだ疑問だからである。そうしたことを考えて、英語表記を併記することを考えているが、そうするとまた英語だけでいいのかという問題もでてくる。
- 2) 本データベースでは画像も含めた美術情報のやり取りが基本となっているが、その場合、従来のように、文字データと画像データを区別して、画像について著作権に類する主張がなされた場合、機能が半減するであろう。コンピュータの発達により、今後こうした画像がらみの問題がでてくると予想されるので、データベースにおける画像の取扱いに関して、何らかの取り決めが必要になってくるであろう。
- 3) 最後に本プロジェクトとは直接関係しないことではあるが、この計画を聞いた海外の日本美術研究者の感想としてよく耳にする言葉として、「それはすばらしい企画と思うが、それよりもどうして先に日本国内の日本美術データベース作りを企画しないのか」ということを聞く。確かに言われるとおりであるが、この点については現在東京国立博物館を中心にして進められている、「全国文化財情報システム」構想の一日も早い実現に期待したい。